

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第134集

松谷1・2号古墓発掘調査報告書

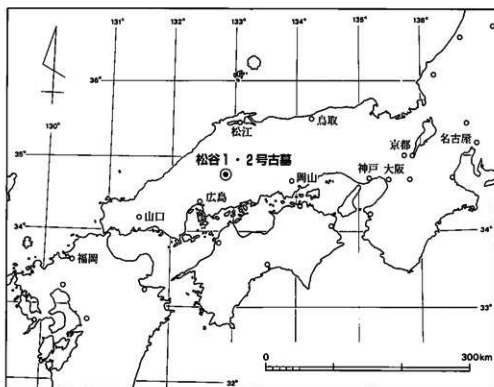
1995

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

広島県埋蔵文化財調査センター報告書第134集「松谷1・2号古墓発掘調査報告書」正誤表

頁	行	誤	正
18	40	つくられることが多い。基壇の	つくられることが多い。 <u>(註(8)b文献)</u> 基壇の

松谷1・2号古墓発掘調査報告書



1995

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例 言

- 1 本書は、1994年5月16日から6月15日に実施した三次市青河町の県営担い手育成基盤整備事業（青河上地区）に係る松谷1号古墓（三次市青河町2145）・松谷2号古墓（三次市青河町2148）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は広島県三次農林事務所と広島県教育委員会から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 発掘調査は財団法人広島県埋蔵文化財調査センターの沖 憲明・鍛冶益生・脇坂光彦が担当した。
- 4 本書の執筆は第Ⅰ・Ⅱ章を鍛冶・沖が、第Ⅲ～Ⅵ章を沖が行い、沖が編集した。
- 5 第1図は建設省国土地理院発行の1：50,000地形図（三次）を使用した。
- 6 本書の地図に用いた方位は第1・2図が真北、他は磁北である。
- 7 遺物番号は分布図（第6・7図）、実測図（第6・7図）、写真（図版6～8）とも共通である。1～35は実測図・写真とも掲載し、36以降は写真のみ掲載している。

目 次

I	はじめに.....	(1)
II	位置と環境.....	(2)
III	調査の概要.....	(5)
IV	松谷1号古墓.....	(6)
V	松谷2号古墓.....	(10)
VI	まとめ.....	(16)

挿 図 目 次

第1図	中世以降の周辺主要遺跡分布図	(3)
第2図	松谷1・2号古墓周辺地形図	(5)
第3図	松谷1号古墓調査範囲図・積石基壇実測図(1)	(7)
第4図	松谷1号古墓積石基壇実測図(2)	(6)
第5図	松谷2号古墓調査範囲図・遺構実測図	(11)
第6図	松谷1号古墓出土遺物分布図・実測図(1)	(12)
第7図	松谷1号古墓出土遺物分布図・実測図(2)・松谷2号古墓出土遺物実測図	(13)

図 版 目 次

図版1	a. 松谷1・2号古墓 遠景(南西から) b. 松谷1号古墓 調査前近景(西から) c. 松谷1号古墓 積石基壇検出作業風景(南西から)
図版2	a. 松谷1号古墓 積石基壇検出状況(北から) b. 同上 (側面観・北から) c. 同上 (側面観・東から)
図版3	a. 松谷1号古墓 立石・丸石下の台状の石検出状況(北から) b. 松谷1号古墓 角礫層上面検出状況(北から) c. 松谷1号古墓 基壇縁石の2段目(東辺・北から) d. 松谷1号古墓 角礫層上面遺物出土状況(西半部・北から)
図版4	a. 松谷2号古墓 調査前近景(西から) b. 松谷2号古墓 石垣状遺構検出状況(西から) c. 松谷2号古墓 土層断面(北から)
図版5	a. 松谷2号古墓 調査後近景(北西から) b. 松谷1号古墓出土 丸石 c. (右)松谷1号古墓の立石 (左)松谷2号古墓の立石
図版6	松谷1号古墓角礫層内・上面出土の陶磁器・土器・数珠
図版7	松谷1号古墓円礫層・攪乱部分出土の陶磁器・土製品
図版8	松谷1号古墓出土遺物陶磁器・石製品、松谷2号古墓出土・採集遺物

I はじめに

松谷1・2号古墓の発掘調査は三次市青河町青河上地区の県営担い手育成基盤整備事業に伴い実施された。この事業は通常のほ場整備事業同様、農地の整備・改善を行うとともに農業後継者の育成を目的としたもので、県内では初めて実施される事業である。

両古墓については1992年3月6日、広島県三次農林事務所（以下「三次農林」という。）から三次市教育委員会（以下「市教委」という。）を通じ、広島県教育委員会（以下「県教委」という。）に対して同事業地内の文化財の有無ならびに取扱いについて照会があった。市教委では計画地域内の現地踏査を実施し、両古墓を確認した。市教委ではこの結果を副申として県教委に照会した。

これに対して県教委は市教委の副申内容等を考慮し、同年4月18日、遺跡が存在するため工事着手に際しては事前に発掘調査が必要である旨を三次農林に回答した。その後協議を重ねたが、計画変更等が困難なことから発掘調査を実施し、記録保存することとなった。

経費は文化庁長官と農林省構造改善局との覚書「文化財保護法の一部改正に関する覚書」5条に基づき、事業者負担分（85%）を三次農林が、農家負担分（15%）を県教委が負担することとして、1994年4月に三次農林は事業者負担分について、県教委は農家負担分について財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）に発掘調査を依頼し、センターでは1994年5月16日から6月15日まで発掘調査を実施した。

本報告書は以上の経過のもとに行われた発掘調査の成果を取りまとめたものである。なお、発掘調査にあたっては、広島県三次農林事務所、三次市教育委員会、三次市農政課、広島県立歴史民俗資料館、地権者及び付近在住の方々から多大な御協力と御教示をいただいた。また出土遺物については多くの研究者から御教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。

II 位置と環境

松谷1・2号古墓が所在する三次市青河町松谷地区は、現在の三次市街地から約6km南に位置する。松谷地区は広さ約500m四方、標高200m前後をはかる盆地地形を呈している。南側と北側には標高約300mの山々が連なり、盆地南西部には江の川の支流・松谷川が南東から北西方向へ流れている。松谷1・2号古墓はこの小盆地のほぼ中央部に位置する。本古墓の付近は西に向けてわずかに下る緩斜面で、周囲の平坦地は水田が大部分を占めるのに対し、現在の住宅・主要な道路・墓地は多くが盆地の縁辺部に位置している。

本古墓群が所在する松谷地区の遺跡分布の詳細な状況は明かでないが、周辺地域の状況を通して中世以降の歴史的環境について概観してみたい⁴⁾。

鎌倉期以降、当地域に勢力を保有していた豪族は三次市昌敷町の比叡尾山城に依拠していたとされる三吉氏である。三吉氏は承久の変ののち、地頭職を得て当地域に入部してきたといわれており、当地域周辺にはその他にも庄原の山内氏、三次市和知町の和智氏、甲田町の穴戸氏のようにほぼ同時期に入部してきたと思われる東国武士団が数多く存在していたようである。

その後、各氏は鎌倉末期から南北朝期、さらに戦国期にかけて周辺の守護大名等の動きと関連して、複雑な動きを見せている。特に安芸地域においては有力な守護大名が成長しなかったことから、有力国人衆がその時々々の情勢に合わせて盟友関係を結んでは、また放棄するというような複雑な状況を示している。特に大永年間以降、周防の守護大名内氏の安芸・備後地域への進出や因幡・伯耆を本拠地とする尼子氏の南進によって当該地域の国人衆は両勢力に分裂し、合従連衡を繰り返してきたようである。

このような政治的環境の中で鎌倉から戦国期にかけて多くの山城が成立している。

このうち三吉氏に関連するといわれる山城跡としては先述の比叡尾山城跡のほか、比熊山城跡、勝山城跡、平家ヶ城跡、加井妻城跡などが知られている。このうち加井妻城跡⁵⁾は1977年に発掘調査が実施された。この山城は11の郭と堀切等から成り、1郭と2郭を除いた部分の発掘調査が実施された。その結果、4郭からいくつかの柱穴が検出され、掘立柱建物跡の存在が推定された。また最も規模の大きな7郭からは礎石やピット群が検出されており、何棟かの建物の存在が想定された。遺物としては陶磁器、鉄製の鋤先、釘、蓋、土錘などがあった。これらの遺物から本城跡の存続期間は15世紀後半から16世紀頃と考えられている。

山城跡以外の発掘調査例としては古墓等があげられる。このうち1983年に発掘調査が実施された三次市糸井町に所在する糸井古墓群では、計6基存在する古墓のうち第2号古墓から第6号古墓までの5基が発掘調査された⁶⁾。第3号古墓と第5号古墓はすでに削平が著しかったため内容等は明かではないが、第2号古墓、第4号古墓、第6号古墓の残存状況は比較的良好であった。

第2号古墓では28基の土壙墓が検出された。土壙墓の多くは積石基壇や積石塚を上部構造としてもつが、その後これらのほとんどを覆うかたちで長方形の基壇が2段階にわたって構築されている。土壙墓群からは磁器、煙管、鉄釘等が出土した。

第4号古墳は長方形の基壇内に亜角礫で土壘状積石を構築し、さらに盛土して墳丘を作り出したものであった。埋葬施設と推定される土壘状積石部から鉄製の刀子等を検出した。第6号古墳は平面三角形の墳丘が残存する古墳であった。計11基の土壘を検出し、内部から鉄釘、古鏡（寛永通宝など）、磁器、土師質土器等が出土した。これらの遺物から本古墳群の存続時期は中世末から近世と推定される。

このほか三次市和知町の福正寺北遺跡群⁽⁴⁾、同市有原町の郷古墳など⁽⁵⁾で発掘調査が実施されている。特徴的なものとしては福正寺北3号遺跡で検出した「神輿棺」と呼ばれる座棺がある。



第1図 中世以降の周辺主要遺跡分布図 (1:50,000)

1. 松谷1・2号古墳 2. 浅原城跡 3. 平家ヶ城跡 4. 茶臼城跡 5. 勝山城跡 6. 加井妻城跡 7. 青河城跡
8. 八幡山城跡 9. 沼山城跡 10. 砂鷲城跡 11. 寄貞城跡 12. 三段田城跡 13. 門田敦盛古墳 14. 七日市古墳

これは昭和初期ないしそれ以降のものと考えられている。

このほかに、古墓の調査例ではないが、最近の発掘調査例の中から三次市大田幸町の山崎遺跡⁴⁾を取り上げてみたい。

山崎遺跡は1993年度に発掘調査された遺跡で、古代から中・近世にいたる遺構を検出した遺跡である。このうちB区と呼称される調査区からは、中世の掘立柱建物跡、井戸跡、土壇等が検出されている。なかでも特筆すべきは、SK9と呼称される小土壇から和鏡、古銭、土師質土器等にとまって呪符と考えられる円札2枚が出土したことである。

これら2枚の円札はいずれも直径108mm、厚さ1.5mmであり、和鏡上から2枚重なった状態で出土した。2枚重なった上方側の上面には墨書を確認することができなかったものの、ほかの3面には人名や干支、梵字等の墨書が確認できた。

この墨書の内容について奈良大学の水野正好氏は、京都府天田郡夜久野町所在の矢谷遺跡出土の円札との類似性を指摘している。つまり山崎遺跡の円札は矢谷遺跡の円札と同一系統の秘法書に基づく呪符であり、使用目的はいずれも呪いであることなどを明らかにし、山崎遺跡出土の円札は呪返しの可能性があるとして指摘している。成立年代については出土古銭の初鑄年と円札に記載されていた「丁酉」という干支から1477年、1537年、1597年を想定している。

このように山崎遺跡出土の呪符資料は、中世社会におけるまじないの一端を垣間みることができるといえる。

以上、当該地域における中世以降の歴史的環境が複雑な様相を示していることが文献史的観点からも、また発掘調査における成果からもある程度窺い知ることができる。今後の資料の増加によって、より詳細な検討も加えられよう。

註

(1) 古代以前の歴史的環境については省略したが、三次盆地やその周辺では多くの遺跡が確認されている。最もものとしては下本谷遺跡（三次市西瀬屋町）の石器群がある。給良丹沢火山灰の火山ガラスのピークより下位の層序から石器群が検出されており、この地域に少なくとも2万年以上前から人が居住していたことがわかる。

(2) 広島県教育委員会 「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(2) 1980年。

(3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 「糸井古墓群発掘調査報告―県営園場整備事業糸井地区に係る埋蔵文化財の発掘調査―」 1984年。

広島県立埋蔵文化財センター 「糸井第2号古墓発掘調査報告―県営園場整備事業糸井地区に係る発掘調査―」 1984年。

(4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 「福正寺北遺跡」 1990年。

(5) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 「郷古墓発掘調査報告書」 1989年。

(6) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 「山崎遺跡」 1994年。

河野龍彦 「美波羅川流域のまじない」『研究輯録』IV 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1994年 第15～30頁。

参考文献

西本省三・葛原克人編 『日本城郭大体系』第13巻 広島・岡山 1980年。

広島県教育委員会 「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1979年。

広島県教育委員会 「下本谷遺跡発掘調査概報」 1980年。

広島県教育委員会 「下本谷遺跡第2次発掘調査概報」 1981年。

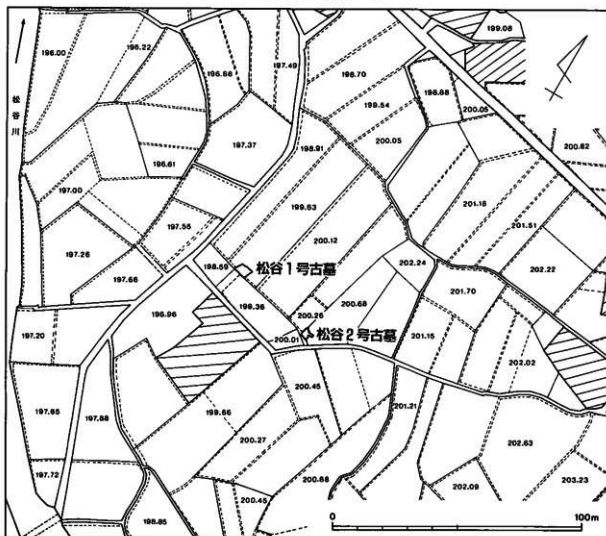
広島県教育委員会 「下本谷遺跡第4次発掘調査概報」 1984年。

Ⅲ 調査の概要

松谷1・2号古墓の周囲は発掘調査開始時には場整備が始まっており、旧地形が削平等により改変されていた。1号古墓を含む方形の範囲(約12㎡)と2号古墓を含む三角形の範囲(約8㎡)のみが残されていたため、発掘調査はこの範囲内を中心に行った。

松谷1号古墓では方形の積石基壇が検出された。基壇内部には礫が充填され、上・下2層に分離できた。遺物は下層の上面から上層中を中心に、陶磁器、石製品、鉄器などが検出されたほか、周囲の水田耕作土中からも少量出土した。埋葬施設は確認できず、基壇内部の土壌を一部フルイ(3mmメッシュ)選別するなどしたが、埋葬行為に直接関連する遺物は検出できなかった。

松谷2号古墓では石垣が検出された。北半分は後世の積み直しと判断されたため除去し、残りの部分を堆積状況を確認しながら掘り下げた。遺物は、陶磁器類やガラス器が地表面付近や石垣の裏込め、石垣構築前の地表面から出土した。なお、石垣構築前の地表面で溝状の落ち込みを検出したため、深掘りを行って断面形と埋積状況を確認した。



第2図 松谷1・2号古墓周辺地形図(7ミ目部分が調査範囲。1:1,500)

IV 松谷1号古墓

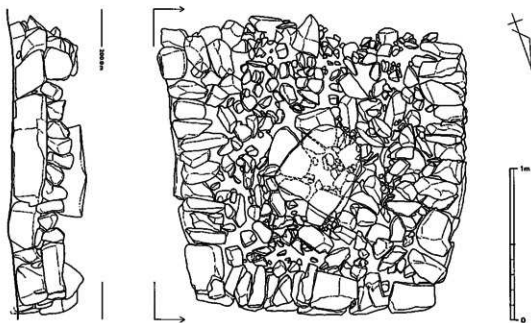
1. 検出した遺構

積石基壇 (第3・4図)

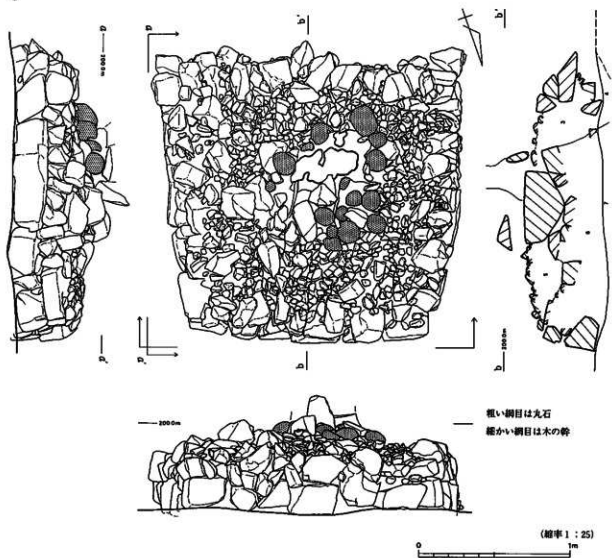
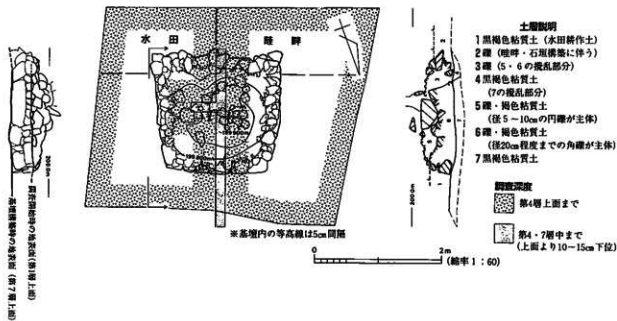
平面形は台形を呈する。各辺の長さは東辺・西辺が約1.9m、南辺が約2m、北辺が約1.7mで、緑石の基底面から上端までの高さは約0.4mをはかる。西辺の南半分は石が乱雑に積みまれ、南辺には1段目に相当する石がない。断面でも攪乱の痕跡が観察できたことから、南西寄りの部分は後世に積み直されたと判断された。構築時は基壇が南方向にもう少し長かった可能性もある。

基壇の緑石の石積は2段を基本とする。1段目には直方体に近い形状の石材が長手積みに据えられる。長さ20~30cm程度、高さ・奥行き各20cm弱程度の割石が多く、2段目の石よりは大型である。2段目は隅に1段目と同様の直方体状の石材が据えられ(北西隅では後に石材が抜き取られたと考えられる)、その間に厚さ10cm程度の板状の石を立てて小口積みに並べている。

基壇内部は、緑石基底面から1段目上端付近までが径10~15cm程度の角礫・亜角礫を主体とする層(以下、角礫層とよぶ)、その上は径5~10cmの円礫を主体とする層(以下、円礫層とよぶ)である。円礫層・角礫層とも礫の隙間には褐色~暗褐色の粘質土が入っていたが、しまりは弱く、後に流入した土と考えられる。中央部の角礫層上面には逆四角錐形の石塊が、1辺50cm程度のほぼ正方形の平坦な面を上に向けて台状になるように据えられていた。この台状の石の真下の角礫は径20~30cm程度のやや大型のもので、上の石の固定を意識したものと考えられるため、この石塊は基壇構築当時からあったと考えられる。この台状の石の上には高さ約30cmの三角錐状の立石1個が置かれ、それを取り巻くように径6~18cm程度の球形の礫(以下「丸石」と呼称)16個が



第4図 松谷1号古墓 積石基壇実測図(2)(1:25. 立石・丸石・円礫層除去後の状態)



第3図 松谷1号古墓調査範囲図・積石基礎実測図(1)

置かれていた。また基壇中央部には高さ2m程度の常緑性の木が1本生えていた。地元の人が「アオギ」又は「アオジ」と呼ぶ種類の木で、榊や南天のように供えられた枝が根づいたのではないかと推定される。

基壇の基底面である黒褐色粘質土層上面は基壇構築時の地表面と考えられる。黒褐色粘質土層上面は基壇中心部付近でわずかに窪むほかは基壇内・外ともほぼ平坦で、掘り込み等は確認されなかった。南寄りの部分で基壇の攪乱部分に対応する土層の攪乱が認められたが、これは水田畦畔・用水路をつくる際の攪乱と考えられる。

2. 出土した遺物

(1) 基壇内出土遺物

ガラス製品、陶磁器・土器、石器・石製品が出土した。先述のとおり基壇構築時には内部に土が堆積していなかった可能性が高く、小さい遺物は石の隙間を伝って落ち込む可能性が大きいと思われた。そこで、円礫層を構成する一般的な大きさの礫よりも大きい、破片の最長辺または対角線長が3cm以上の遺物を中心に、遺物の分布傾向を検討した。その結果、包含層から

- 角礫層内・上面出土の遺物（基壇構築と時間的に近接する時期の遺物）
- 円礫層内出土の遺物（基壇構築から時間を置いた、後の時期のものと考えられる遺物）
- 攪乱部分出土の遺物（複数時期のものが混在する）

に分類した。以下、それぞれについて説明する。

a. 角礫層内・上面出土の遺物（第6図、図版6・8）

陶磁器・土器、石器・石製品、炭化物がある。

陶磁器・土器を器形別にみると、碗（1・6・8・36～38・42）が多く、次いで小壺（11・13）や小形の鉢（7・12・47）といったものが目立つ。磁器は肥前系が多く（2・3・5～10）、陶器は肥前系（11・12）、関西系などがあるが、産地の同定できたのは瀬戸産の広東碗1個体（1）と肥前産の皿1個体（10）のみである。接合の結果完形に近い状態まで戻る個体（1～3など、碗や小形の鉢のような器形が多い）は供献に使用された可能性が高い。破片数の少ない個体は投棄されたものとも考えられる。

石器・石製品には砥石（15・87）、石塔破片（16）、数珠（17）がある。石塔破片は基壇構築当初基壇上に立っていたものの可能性が考えられる。砥石は基壇内部の充填材料として他の石にまぎれて詰め込まれた可能性が高い。

炭化物は基壇西半部の角礫層内堆積物を3mmメッシュのフルイにより選別した際に検出された。径1cm程度までの炭化した木材がほとんどであるが、同様のものが黒褐色粘質土層中からも検出されており、基壇に伴うかどうかは不明である。

b. 円礫層出土の遺物（第7図、図版5・7）

陶磁器・土器、屋根瓦、ガラス製品、石製品がある。

陶磁器・土器には碗（18～21・59・73）、急須または土瓶の蓋（23）、鍋の把手（22）などがある。細片が多く、供獻に使用されたというよりも投棄されたと考えるのが適当かと思われる。

ガラス製品は大半が板ガラスの破片と考えられ、やはり投棄されたものと考えられる。容器の破片もあるが、細片のため器形は不明である。

石製品には石塔の破片、立石、丸石がある。

石塔の破片（24）は丸石と混在して置かれており、廃棄された石塔の一部を丸石に再利用したものと判断した。石塔の廃棄時あるいは丸石への加工時のものと思われる欠損部分や、風化等による表面の剥落部分が多いが、五輪塔の空風輪の破片と考えられる。角礫層上面で出土したものは石質がやや異なり、別個体の可能性が大きい。角礫層上面に立っていた石塔の一部である可能性と、丸石のひとつとして他所から搬入された可能性の両方が考えられる。

立石（図版5c右）は三角錐形を呈する。支えなしでは大きく前傾して立たないため、周囲の円礫や丸石と同時にそれぞれ以後に据えられたと考えられる。縁辺部に整形時のものと思われる打ち欠きの痕跡があるが、表面の剥落等もあり、加工の順序や程度については明らかにし得なかった。

丸石（図版5b）は15点出土した。最大のものは長径17.6cm・重さ6.585kg、最小のものは長径5.7cm・重さ0.380kgである。表面は概して平滑であるが、人為的な研磨等が行われているかどうかは明かでない。ただ、本古墓付近の河原などの転石にはみられない大きさ・形状の石であり、ある程度離れた場所から搬入された可能性は高いといえる。

c. 攪乱部分出土の遺物（第7図、図版7・8）

陶磁器、屋根瓦、ガラス製品、ビニール製品が出土した。陶磁器は碗（25～29・65～68）が目立つ。完形に近いもの（25・26）は本古墓への供獻に使用された可能性もあるが、屋根瓦（32）、ガラス製品、ビニール製品などと同様、本古墓とは無関係に投棄された遺物が混入した可能性が充分にある。

（2）基壇外出土遺物（図版8）

本古墓周辺の水田耕作土や攪乱土層中、水田畦畔の石積内部から陶磁器などが出土している。陶磁器には磁器碗が主体で、ほかに皿などがある。大半が19世紀代に属すると思われる。88は花崗岩質の石材の表面に鉄分が付着したものである。鉄分は高温によって融けて付着したものであるが、用途は不明である。

V 松谷2号古墓

検出した遺構と遺物

1. 石垣状遺構 (第5図)

北北東-南南西方向に伸びる。長さは約3.6m、基底面から上面までの高さは約0.4~0.5mをはかる。北端から約2mの範囲では石が乱雑に積まれ、北端でコンクリート製水田畦畔に寄りかかるように石が積まれていたことから、この部分は現代の積み直しと判断される。

南寄りの部分では石積は概ね2段である。1段目には1辺20~30cm程度の大きさの角礫が、上端の側面観が鋸歯状になるように置かれる。2段目は高さ40~50cm、幅・奥行き20cm程度の、カドのとれた厚板もしくは角柱状の自然石で、南側へもたせかけるように並べられる。その際、2段目の石の下端のカドは1段目上端の凹凸にかみ合わせてある。南端には径60cm程度の大きな垂角礫が据えられ、2段目の石はこの石にもたせかけてあった。

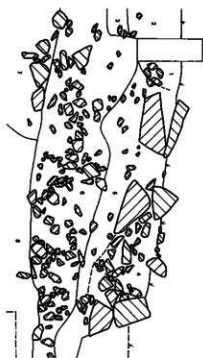
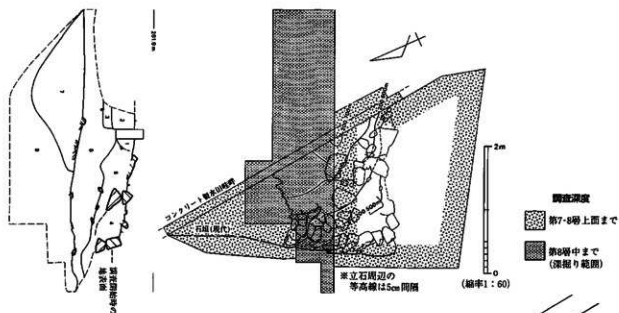
石垣とコンクリート製水田畦畔に挟まれた三角形の範囲内の中心部には高さ約60cmの三角錐状の立石 (図版5c左) が1個据えられていた。立石は表面がかなり平滑で、打ち欠き・敲打・研磨等の加工痕ははっきりしない。その下は径5~10cm程度の円礫から一辺40cm程度の垂角礫まで、さまざまな大きさ・形状の礫を含む褐色~暗褐色粘質土である。これらの礫は石垣の裏込め部分 (第5図土層説明の4) 以外、人為的に寄せ集められたとは認められなかった。石垣の裏側の主要な堆積物である暗褐色粘質土は石垣の基底面の下、さらに西側の水田耕作土の下にも続いており、石垣の周辺全体の整地土層と考えられる。また、掘り込み等の遺構も検出されなかった。

出土遺物 (第7図、図版5c・8)

立石周辺の地表近く (褐色粘質土・暗褐色粘質土最上部) から花器 (33)、石垣状遺構裏込めの褐色粘質土中からガラス瓶 (34)、石垣構築前の地表面と思われる黒褐色粘質土上面から磁器碗 (85) が出土した。ほかには立石周辺を中心に、陶磁器や土器 (35・81~84・86) が表面採集されている。

2. 流路跡 (第5図)

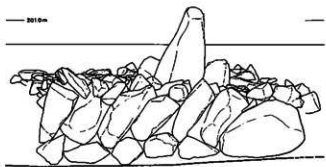
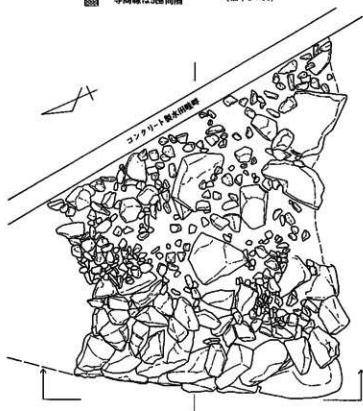
明褐色砂質土層上面で検出した。断面形はV字形に近く、幅約2.5m、深さ約0.8mをはかる。深掘り範囲内では北東-南西方向に続いていたが、水流の方向は不明である。埋土は上部が黒褐色粘質土ブロックと明褐色砂質土ブロックが混在する土層、下部が黄褐色砂質土層と黄褐色砂礫層の互層で、両側から少しづつ流入・堆積した形跡を示す。遺物は出土しておらず、人工物か自然流路かも不明である。



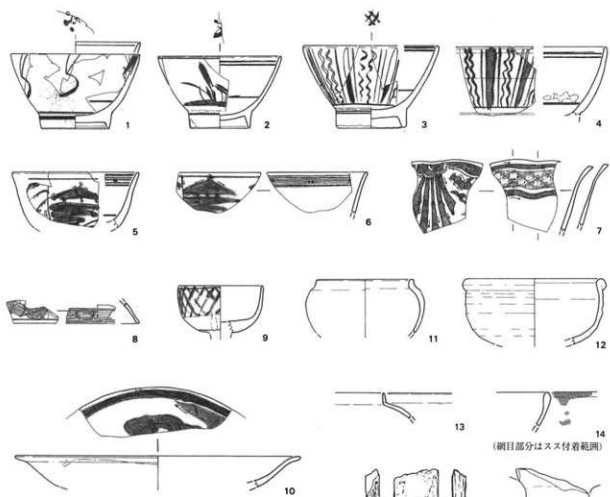
土層説明

- 1 暗褐色粘質土 (コンクリート製味噌桶埋築時の覆土)
- 2 暗褐色粘質土 (水田耕作土)
- 3 暗褐色粘質土。やや黒味強い。(水田耕作土)
- 4 褐色粘質土・礫 (石垣構築時の裏込め)
- 5 暗褐色粘質土。
- 6 黒褐色粘質土。礫を多量に含む。
- 7 黒褐色粘質土と明褐色砂質土の互層。(流路跡埋土)
- 8 明褐色砂質土。

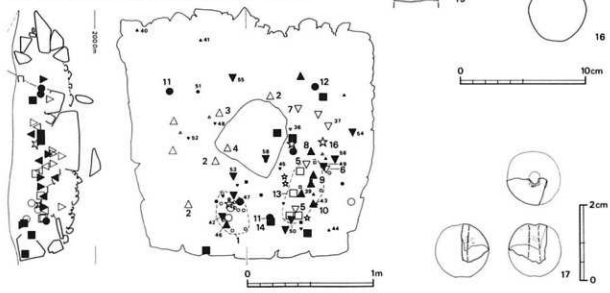
(縮率1:25) 0 1m



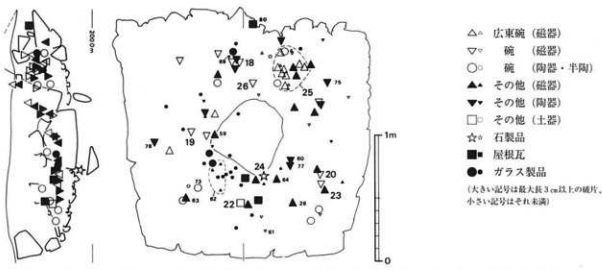
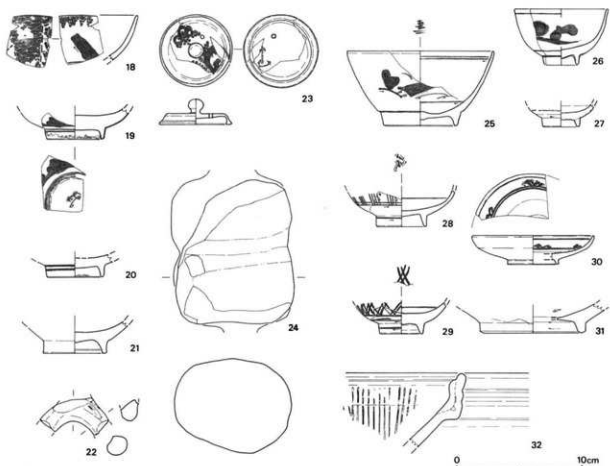
第5図 松谷2号古基 調査範囲図・遺構実測図



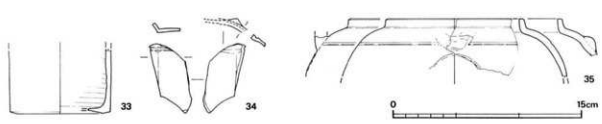
- △=広東碗 (磁器) ●=小壺・片口鉢 (陶器) ▲= その他 (磁器)
 ○=広東碗 (陶器) □=小壺 (土器) ▼= その他 (陶器)
 ▽=瀧反碗・鉢 (磁器) ☆=石製品 ■= その他 (土器)
- (大きい記号は最大長3cm以上の破片、小さい記号はそれ未満)



第6図 松谷1号古墓出土遺物分布図・実測図 (1) (分布図-1:30, 実測図-1:3(1~16)1:1(17))



- △△ 広東碗 (磁器)
 - ▽▽ 碗 (磁器)
 - 碗 (陶器・半陶)
 - ▲▲ その他 (磁器)
 - ▼▼ その他 (陶器)
 - その他 (土器)
 - ☆ 石製品
 - 屋根瓦
 - ガラス製品
- (大きい記号は最大長3cm以上の破片、小さい記号はそれ未満)



第7図 松谷1号古墓出土遺物分布図・実測図(2)・松谷2号古墓出土遺物実測図(分布図-1:30, 遺物実測図-1:3)

a. 松谷1号古墳・角礫層上面出土遺物

(磁器)

調査 番号	種別 番号	器種	計測値(cm)			成形・調整技法、文様等手法(内一内面)	胎土(色調等)	備考	
口径	底径	器高							
2	第6回	図版8	広東碗	(9.8)	4.6	5.75	象付 外一草花文 内一團縁、見込に判読不明の文様	淡青灰色	肥前系
3	第6回	*	広東碗	(10.8)	5.2	6.65	象付 外一よけ楕文 内一團縁、見込に非折状文様	淡青灰色	肥前系、1780-1840年代
4	第6回	図版6	広東碗	(12?)	-	-	象付 外一よけ楕文 内一團縁、見込部に直む稜状文様	先沢ある青灰色(黒褐色細粒含)	1780-1840年代
5	第6回	*	越反碗	(9.9)	-	-	象付 外一団縁山水文 内一團縁	淡青灰色(暗褐色細粒含)	肥前系、1820-1860年代
6	第6回	*	越反碗	(10.3)	-	-	象付 外一団縁山水文 内一團縁	淡青灰色(暗褐色細粒含)	肥前系、1820-1860年代
39	*	碗?	-	-	-	-	象付 外一不明 内一團縁	先沢ある淡青灰色(暗褐色細粒含)	
40	*	碗?	-	-	-	-	象付 外一團縁 内一團縁	先沢ある青灰色(暗褐色細粒含)	
41	*	?	-	-	-	-	象付 外一草?	先沢ある青灰色(暗褐色細粒含)	
42	*	碗	-	-	-	-	象付 外一内面に草?高台内・外に團縁	透明感ある青灰色(暗褐色細粒含)	
43	*	碗?	-	-	-	-	象付 外一草花文?内一不明 輪に気泡含む	透明感ある青灰色(暗褐色細粒含)	
7	第6回	*	鉢	-	-	-	象付 外一雲など 内一	淡青灰色(暗褐色細粒含)	肥前系、1820-1860年代
8	第6回	*	碗の蓋	(9.87)	-	-	象付 外一草・草 内一雲文	淡青灰色(暗褐色細粒含)	肥前系、1820-1860年代
36	*	碗の蓋	-	-	-	-	象付 内・外一不明	淡青白色(暗褐色細粒含)	肥前系
37	*	碗の蓋	-	-	-	-	象付 外一格子文 内一格子文	淡青灰色(暗褐色細粒含)	肥前系
38	*	碗の蓋	-	-	-	-	象付 内一格子文	淡青灰色(暗褐色細粒含)	肥前系
9	第6回	*	仏飯器	(6.5)	-	-	象付 外一斜格子文、部分的に輪が厚く絵が消える	青灰色(黒褐色細粒含)	肥前系、18世紀末-19世紀中葉
44	*	花立て?	-	-	-	-	象付 外一不明、口縁部外面は化粧土が厚い	淡青灰色(黒褐色細粒含)	肥前・志田産、19世紀初葉-幕末
10	第6回	*	皿	(22.2?)	-	-	象付 内一不明、口縁部外面は化粧土が厚い	淡青灰色(黒褐色細粒含)	肥前・志田産、19世紀初葉-幕末
45	*	紅皿	-	-	-	-	口縁部は化粧土施さず、外一草花文か	透明感ある青灰色(暗褐色細粒含)	
46	*	皿	-	-	-	-	見込部蛇ノ目縁割ぎ 象付 内一不明	淡灰褐色、気泡状の空理が多い	

(陶器)

1	第6回	図版8	広東碗	(10.2)	5.2	5.9	陶胎象付 外一振り文 内一團縁、見込に五弁花	淡灰褐色	瀬戸産、1820-1850年
11	第6回	図版6	小壺	(7.7)	-	-	口縁部部を除き内・外面とも施釉	暗青灰色(黒色細粒含)	関西系、19世紀
12	第6回	*	片口鉢	(10.7)	-	-	口縁部部は玉縁状、内・外面とも施釉	暗青灰色(黒色細粒含)	関西系、19世紀
47	*	?	片口鉢	-	-	-	口縁部部は玉縁状、内・外面とも施釉	暗赤紫色(白色細粒含)	
48	*	?	-	-	-	-	外面のみ施釉	青灰褐色	
49	*	?	-	-	-	-	内・外面とも施釉	暗青灰褐色	
50	*	?	-	-	-	-	内・外面とも施釉	暗褐色(先沢あり)	
51	*	?	-	-	-	-	内・外面とも施釉	暗灰褐色	輪に気泡含む
52	*	花立て?	-	-	-	-	内・外面とも施釉	暗青灰褐色	
53	*	鉢?	-	-	-	-	内・外面とも施釉	灰褐色-櫻褐色	
54	*	壺?	-	-	-	-	内・外面とも施釉	淡灰褐色(口縁部まで白色砂粒含)	透明(黒色?)物の上に黒色不透明の粒を重ねる、下の粒が透けて黒色に見える部分あり
55	*	壺	-	-	-	-	内・外面とも施釉	淡灰褐色(口縁部まで白色砂粒含)	
56	*	壺?	-	-	-	-	外面のみ施釉	淡赤褐色(内)暗赤銅色	
57	*	壺?	-	-	-	-	外面のみ施釉	暗褐色(口縁部まで白色砂粒含)	
58	*	?	-	-	-	-	施釉せず	淡灰褐色(口縁部まで白色砂粒含)	

(土器)

13	第6回	図版6	小壺	(10.9?)	-	-	外一①肩部：下→上方向のナデ ②腹-肩部の変換部：左下→右上方向のナデ 内一ナデ	淡褐色	
14	第6回	図版6	焙烙	(21.9?)	-	-	外・内一ヨコナテ	淡褐色(口縁部まで白色砂粒含)	外面にスス付着

b. 松谷1号古墳・円礫層出土遺物

(磁器)

18	第7回	図版7	碗	(11.2?)	-	-	象付 外一音階線文に白粒まで花弁、草花文(知照部)内一團縁文(型紙部)、不明(手摺き)	青灰色	肥前系、明治10-30年代
59	*	音階碗?	-	-	-	-	象付 外一音字文、破綻区画内に音階線文-輪状文(型紙部)、團縁(手摺き)内一團縁	青灰白色	肥前系、明治10-30年代
19	第7回	*	丸碗	(4.5)	-	-	象付 高台下部は胎露 外一不明、高台内面に判読不明の直線あり、高台に砂目痕(内面に厚く付着)	先沢ある青灰色(黒褐色細粒含)	肥前系
20	第7回	*	碗	-	4.3	-	象付 外一高台に團縁、高台内面に砂目痕、輪に気泡含む	青灰色(褐色細粒含)	肥前系
60	*	碗	-	-	-	-	象付 外一不明 内一團縁	淡青灰色(暗褐色細粒含)	明治か
61	*	碗?	-	-	-	-	象付 内・外一不明、輪に気泡含む	白色(暗褐色細粒含)	明治か
62	*	蓋または皿	-	-	-	-	象付 内一平内形地紋内に花(型紙部)	透明感ある灰白色(暗褐色細粒含)	肥前系、明治10-30年代
63	*	?	-	-	-	-	象付 内一不明、絵付は輪の上から	透明感ある灰白色(暗褐色細粒含)	
23	第7回	*	土瓶または急須の蓋	(5.75)	-	2.05	象付 外一筒内一割説不明の帯筋、帯筋破き穴は外側から丸縁状工具で割突	青灰白色(暗褐色細粒含)	関西系、19世紀
64	*	皿	-	-	-	-	割り出し高台、高台内は化粧土-輪とも無し	淡青灰白色(黒褐色細粒含)	

(陶器・土器)

遺物番号	検出番号	図版番号	器種	計測値(cm)			成形・調整技法、文様等手法(内・内面)	胎土特徴(色調等)	備考
				口径	底径	器高			
21	第7図	図版7	碗(陶器)	-	5.1	-	貼り付け高台 登付外内、内・外面とも施釉	赤-靑褐色、やや橙粒	肥前系、19世紀?、釉は灰濁を含まない白濁した色調を呈する
73			碗(陶器)	-	-	-	内・外直とも施釉	赤褐色	
74			碗(陶器)	-	-	-	外面上半部と内面に施釉	淡黄褐色	
22	第7図	図版7	碗の内子(土器)	-	-	-	ナデ。上部に粘土複合皮あり。	赤黄-褐色 内底-暗褐色、(径1cm程度までの白色粒状物)	

c. 松谷1号古墓・墓壇内攪乱部分・墓壇外出土遺物

(磁器)

25	第7図	図版8	広東碗	(11.5)	5.6	6.0	染付 外一草文 内一團縁、見込に判読不能の銘、見込縁部に直交する重ね模様	淡青灰白色(黒色細粒含)	肥前系、19世紀前半
26	第7図	*	小碗	(7.3)	4.6	2.5	染付 外一松? 高台内面に砂目文、軸に気泡含む	透明感ある白色(黒色細粒含)	肥前系
28	第7図	図版7	丸瓶	-	3.7	-	染付 外一格子文 内一團縁、見込に判読不能の銘	灰白色(黒褐色細粒含)	肥前系
29	第7図	*	丸瓶	-	3.3	-	染付 外一四方華文 内一團縁、見込に丹紅文様	光沢ある青灰色	肥前系 登付は赤色
65		*	碗	-	-	-	染付 外一松、磁器区画内に半円形地紋(型紙用) 内一團縁文(型紙用)	淡灰白色(暗褐色細粒含)	肥前系、明治10~30年代
66		*	碗	-	-	-	染付 外一松文 内一團縁	光沢ある灰色(黒褐色細粒含)	肥前系
67		*	碗	-	-	-	染付 外一亀甲文 内一團縁、軸に気泡含む	淡灰白色(黒褐色細粒含)	肥前系
68		*	碗の蓋	-	-	-	青磁染付 内一四方華文	灰褐色	肥前系、17世紀?
30	第7図	* 皿	皿	(9.6)	(3.9)	2.3	見込縁ノ目割無装、染付 内一草文	淡青白色(暗褐色細粒含)	肥前系
69		*	皿	-	-	-	外一雲母1条 内一見込部に絵付け	光沢ある白色(褐色細粒含)	瀬戸美濃系
70		* 皿	皿	-	-	-	内一見込部に沈線(押印陰刻数字文か)	光沢ある白色	瀬戸美濃系
71		* 皿	皿	-	-	-	内一見込部に押印陰刻数字文	光沢ある白色	瀬戸美濃系
72		* 皿?	皿?	-	-	-	染付 外一本 内一本	光沢ある青灰色(暗褐色細粒含)	肥前系、軸に暗褐色細粒含む

(陶器・土製品)

27	第7図	図版7	小碗	-	2.7	-	削り出し高台、外面上層と内面に施釉	淡黄褐色(やや橙粒、径4mm程度までの白色砂や淡褐色細粒含)	瀬戸系美濃系陶器、18~19世紀
78		*	壺	-	-	-	外一格子目状タタキ 内一ナデ 頸部に複合内・外面とも施釉せず	(表) 淡黄褐色(内) 暗赤灰褐色、径1mm程度の白色砂含む	魚山系陶器
79		*	壺	-	-	-	外一隆起線文様 内一ナデ 内・外面とも施釉	灰褐色(径4~6mm程度までの赤粒含)	陶器
75		*	?	-	-	-	外一ナデ 内一タタキ 内・外面とも施釉	消色一半(淡黄褐色)内面淡黄褐色	陶器
76		*	?	-	-	-	外一沈線1条、外面のみ施釉	淡黄褐色	肥前系陶器
77		*	?	-	-	-	内・外面とも施釉	淡褐色、気泡状空孔あり	陶器
31	第7図	* 鉢	鉢	-	(7.7)	-	削り出し高台、高台部分を除き内・外面とも施釉、見込縁部は施釉せず	黄褐色	関西系陶器、19世紀
32	第7図	* 鉢縁	鉢縁	-	-	-	口縁部を染付または漆で装飾付けた内面、外面に沈線、口縁部に沈線(推定)あり、内・外に施釉せず	(表面) 暗赤褐色(内面) 地灰一赤灰色	備前系陶器
80		* 軒瓦	軒瓦	-	-	-	瓦当面裏面に斜め方向の刻みをつけて瓦部と接合	表面一いし、裏面の光沢もつ青灰色、内面一淡黄褐色-暗褐色	

松谷2号古墓出土遺物

(磁器・陶器・土器・ガラス器)

81		図版8	碗	-	-	-	染付 外一草文 磁器区画内に青磁染付・線状文(型紙用) 内一團縁文(型紙用)	淡青灰白色(褐色細粒含)	肥前系、明治10~30年代表土層出土
82		*	碗	-	-	-	染付 外一青流石に白濁で花車、草花(型紙用、青流石の部分) 赤色の部分には別の型紙を使用) 内一團縁文、見込に文様あり	淡青白色	肥前系、明治10~30年代表土層出土
85		*	碗	-	-	-	染付 外一格子文	淡青灰白色	肥前系、石原状遺構裏部の地層出土
33	第7図	図版8	花立?	-	(6.7)	-	底部は凹底気味の平底、外面底部を除き内・外面とも施釉	暗褐色	肥前系、19世紀表土層出土
83		*	?	-	-	-	内・外面とも施釉	暗褐色	表土層出土
84		*	?	-	-	-	外面と内面下部に施釉	淡黄灰褐色	*
35	第7図	* 京焼or土灰	土灰	(10.8)	-	-	把手部分と注口部はハツケ、沈線1条あり、底部内面上部と外面に化粧土・釉を施す	灰褐色	*
86		* 焙焼	?	-	-	-	口縁外面に粘土帯を貼りつけて肥前させたのち、内・外面ともヨコナデ	外表面一暗灰褐色 内面・内表面一淡黄褐色	*
34	第7図	* 瓶	?	-	-	-	わずかに黄色み帯びる。ナデ方向に長い気泡(長径3mm程度まで)多く含む		石原状遺構裏部の内出土

松谷1号古墓出土石製品(15・87・16・17は角礫層中・上面出土、24は円礫層出土、88は墓壇外出土)

遺物番号	検出番号	図版番号	器種	計測値(cm)				石 材	特 徴
				長さ	幅	厚さ	重量(g)		
87	第6図	図版8	砥石	(7.4)	3.6	(1.3)	-	淡黄褐色(淡黄-赤褐色、キメ細かい)	表面は左上-右下方向の擦痕、両側面は成形時の角切り、またはノミによる割れ目の痕跡、表面は新しい割れ目
15		*	砥石	-	-	-	-	泥灰質あるいは凝灰岩(黄褐色、軟質)	破片6点からなる。原形は不明。
16	第6図	* 石塔	石塔	-	-	-	220	無装束石灰岩(淡褐色を帯びる灰白色)	五輪等・宣量印等などの先端あるいは差し込み部分の突起
17	第6図	図版6	数珠	径(1.4) 孔径2.5-3	-	-	-	水晶か(表面は鮮紅色、内部は無色透明)	表面に細かいヒビが入る。表面は被熱しているか?
24	第7図	図版5	石塔	高(11.5) 最大径約8	-	-	1294	熱変成石灰岩(表面は黒褐色、内部は灰褐色)	五輪等の空風輪か、表面の剥落が顕著。
88		図版8	?	-	-	-	-	細粒花崗岩(灰白色)	表面に滑げた鉄分が付着する。

※計測時のカック付きの数値は黒字で示す。

VI まとめ

1. 松谷1号古墓について

積石基壇1基を検出した。石材の積み方の違いから、19世紀初頭から中葉に構築された後、19世紀第4四半期以降のかさ上げと20世紀後半の一部破壊・積み直しが行われたことが確認できた。

(1) 構築時の積石基壇

a. 構造と年代

基壇内部の詰石は角礫層のみと考えられる。角礫層上面は縁石1段目の上端とほぼ対応する高さで、縁石は1段のみであった可能性が高い。基壇中央部には大きな台状の石が据えられ、角礫層上面で五輪塔の一部とも考えられる石塔の破片が出土したことから、この台状の石の上に石塔が立っていたとも考えられる。

基壇構築時の遺物は角礫層上面出土の陶磁器・土器、砥石、石塔の破片、数珠が該当する。この中には供獻に使用された可能性が高い（完形に近い）ものと、基壇外から混入したり、投棄された可能性が高い（細片の）ものがあるが、陶磁器は大半が19世紀代のものとされる。肥前承継器の一部には18世紀後葉以降とされるものもあるが、本古墓の出土遺物のように生産地のはっきりしないものは年代観の基準となる有田周辺のものや生産年代にずれが生じることも考慮すべきであろう。生産地の明かな瀬戸産の広東碗（第6図1）や肥前産の皿（第6図10）の年代⁽⁴⁾を重視すれば、基壇の構築年代は19世紀初頭から中葉と考えるのが適当であろう。

b. 基壇の性格

本古墓では埋葬の直接的な証拠となる遺構・遺物は検出できなかった。被葬者に関する文献資料も確認されておらず、地元で墓であるという言い伝えが残るのみである。そこで周辺地域の古墓⁽⁵⁾との比較から、本古墓の特徴についてみてみたい。

これまで発掘調査が行われた古墓を埋葬施設の種類から分類すると、①明確な埋葬空間が構築されるもの⁽⁶⁾と②蔵骨器や遺体を直接おさめるので埋葬空間が構築されないもの⁽⁷⁾がある。本古墓は埋葬空間が構築されていないことから②のグループに含まれる。蔵骨器も人骨も検出されていないが、腐朽等の理由によって人骨が確認できなくなったなどのことも考えられる。また本古墓には石塔を伴っていた可能性があるが、積石基壇の上に五輪塔などの石塔を伴う古墓で基壇内部に埋葬関連の遺物・遺構が認められない例⁽⁸⁾もいくつかあり、構造だけをみれば本古墓と同様のものにとらえられよう。一方、これらの墓を石塔の形態などから中世の武士階級のものと考えた例⁽⁹⁾はあるが本古墓の年代とは大きな開きがあり、同一視するには問題がある。江戸時代後期の墓制の研究はあまり進んでおらず、本古墓の被葬者像の解明については今後の類例の増加を待ちたい。

(2) 構築後の基壇の改変

a. 構造と年代

基壇上に円礫層が追加される。基壇中央部で検出された丸石も円礫層に半分埋没するか上に置

かれるかしており、円礫層の追加と同時期に置かれたと判断される。また先述のとおり、緑石の2段目もこのとき追加された可能性が高い。緑石2段目の東辺では奥行き長い石と短い石を交互に並べてあるが、これは基壇の外観上の装飾の意味が考慮されている、つまり緑石2段目の上面は構築時には露出していた可能性が考えられる。

この時期の遺物は円礫層中出土の陶磁器、ガラス製品、基壇中央部付近の丸石などが該当する。遺物は円礫層全体から出土しており、長期間継続的に円礫や遺物の追加・投棄が行われたと考えられる。年代をみると19世紀以降、近・現代のものまでであるが、小谷焼(明治10～30年代に生産)¹⁷⁾と考えられる磁器碗の破片が出土していることから、円礫層や丸石の追加は19世紀第4四半期頃には始まっていたと考えられる。供献に使用したと思われる完形に近い陶磁器も、現代に至るまでのものがあり、この基壇がごく最近まで信仰の対象とされていたことが窺える。

なお、基壇南寄りの部分は破壊・積み直しが行われている。その時期は出土遺物から現代のごく新しい時期(20世紀後半)と考えられる。水田畦畔とほとんど一体化している南辺でも基壇緑石に相当する石列を復元しており、基壇を保全しようとする意識が依然強かったことが窺える。

b. 基壇の性格

ここで注目される点は基壇上に丸石が置かれることで、この丸石が円礫層追加後の基壇の性格を考える上で重要であると思われる。この丸石は考古学的には性格を特定できないが、丸石を神体とする民間信仰¹⁸⁾との関連が考えられる。この時期には多様な民間信仰が存在する上、地元にも伝承は残っていないため何をまつっていたのかは不明であるが、墓すなわち祖先信仰と同居し得るような性質のものであろう。つまり、19世紀第4四半期を中心とする時期にこの基壇が何かの民間信仰の場に変更されたか、民間信仰の場としての機能が付加されるようになったと考えられる。円礫層の追加などといった基壇のかさ上げも基壇の機能を変更させるにあたっての化粧直しの意図があったのかもしれない。周辺地域にも江戸時代末期から明治時代に構築されたり石が追加されたりする古墓や積石基壇があり¹⁹⁾、石積みの構築物を必要とする民間信仰が流行した可能性もあることから、江戸時代末期以降のこの地域における民間信仰の一端を示す例といえよう。

2. 松谷2号古墓について

石垣状遺構1基、立石1基と、時期不明の溝状遺構1条を検出した。

石垣状遺構は19世紀中葉に構築され、昭和30年代頃に一部改修されたと考えられる。石材の大きさ、土層堆積状況、周辺地形等から、水田畦畔の土留めの目的で構築された可能性が高い。

立石は石垣状遺構の構築後、19世紀第4四半期頃までの間には設置されていたと考えられる。地元では墓標石として認識されていたが、付帯する埋葬施設は確認できなかった。ただし、立石の形状は1号古墓のものと同様であることから何らかの関連も想定でき、水田の区画整理等の際に立石だけが移築された可能性も考えられる。いずれにしろ供献に使用されたと思われる陶磁器は出土しており、地元の方々の信仰のよりどころとしての機能を果たしてきたといえる。1号古墓同様、近世以降のこの地域における信仰の具体例の一つといえよう。

3. 結語

松谷1・2号古墓は本来は墓として構築されたと考えられるが、少なくとも19世紀第4四半期頃には民間信仰の場として機能していたとみられ、その機能は発掘調査直前まで持続されていた。特に1号古墓は信仰の対象(何をまつるか)が変化していく様子を示す具体例として、近・現代における民間信仰のあり方の一端を示す良好な資料を提供したといえる。民間信仰に関連する遺構には、構築された場所から何をまつるものなのかがある程度推定できる場合がある⁽¹⁰⁾ため、今後の発掘調査の際には周囲の住宅・墓地・道路・耕作地や山・川などとの位置関係、ひいては集落景観全体を把握することが必要であろう。

註

- (1) 瀬戸産広東碗の年代は、服部 郁「近世瀬戸窯における磁器生産の開始と展開」『財団法人 瀬戸市埋蔵文化財調査センター 研究紀要』第2輯 1994年 第123～152頁などを参考にした。肥前産皿の年代は大橋康二氏(佐賀県立九州陶磁文化館)の御教示による。
- (2) 広島県北部の江の川流域に所在し、人骨・歯、あるいは棺やその痕跡が遺存していたもののみを検討対象とした。
- (3) 三次市糸井第2号古墓第1～28号墓(土壊を掘る。文献a)、三次市糸井第4号古墓(土型状積石によって棺の設置スペースを設ける。文献b)など。
 - a. 広島県埋蔵文化財センター編集『糸井第2号古墓発掘調査報告—県営園地整備事業糸井地区に係る発掘調査—』広島県教育委員会 1984年。
 - b. (財)広島県埋蔵文化財調査センター『糸井古墓群発掘調査報告—県営園地整備事業糸井地区に係る埋蔵文化財の発掘調査—』1984年。
- (4) 甲田町山田横石塚(蔵骨器をおさめる。文献a)、吉田町森山積石塚(土葬骨を直接おさめる。文献b)、千代田町上春木第1号墳墓(火葬骨を直接おさめる。文献c)。
 - a. 広島県教育委員会編『山田横石塚発掘調査報告』甲田町文化財保護委員会 1972年。
 - b. 広島県教育委員会『森山積石塚発掘調査概報』1975年。
 - c. 龍岩・古保利発掘調査団『龍岩・古保利・上春木埋蔵文化財発掘調査報告書—広島県山県郡大朝町・千代田町所在—』1976年。
- (5) 八千代町桑の木五輪塔・宝篋印塔、新開宝篋印塔など(下記文献)。
土師埋蔵文化財発掘調査団『土師—土師ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査概報』1970年。
- (6) 八千代町桑の木五輪塔・宝篋印塔など(註(5)文献)。
- (7) 村上正名『広島のやきもの—広島県窯業史序説—』図書刊行会 1984年。
- (8) 塞の神・道祖神、田の神などへの信仰がある。塞の神・道祖神は本来、境の内側の世界を守ると考えられているが、その後安産・子育てなどに関する信仰も付加されたい。田の神は農業の神で、大歳さんなどとも呼ばれる。自然信仰には山神・水神・荒神などと呼ばれるものもあるが、他の民間信仰等の影響で祖先信仰など、生活をとりまく様々なものへの信仰が付加されているようである。
 - a. 『88 道祖神』滝澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』第一巻 平凡社 1984年 第117頁。
 - b. 桜井徳太郎編『民間信仰辞典』東京堂出版 1980年 第112・202～203頁。
- (9) 三次市郷古墓など。
(財)広島県埋蔵文化財調査センター『郷古墓発掘調査報告書』1989年。
- (10) たとえば、塞の神・道祖神は集落の入り口にあたる峠や橋のたもと、また道路の交差点などにつくられることが多く、地祖信仰に関連する施設は家の敷地の北西隅につくられることが多い。墓壇の周囲に欄干などが描かれている絵図もあり(註(8)a文献)、周囲をできるだけ広く調査して他の遺構との位置関係をみることも重要と思われる。

図 版



調査前の松谷1号古墓（手前）・2号古墓（奥）（西から）

a. 松谷1・2号古墓
遠景 (南西から)



b. 松谷1号古墓
調査前近景 (西から)



c. 松谷1号古墓
積石形州岡作業
風景 (南西から)



a. 松谷1号古墓
積石基壇検出状況
(北から)



b. 同上
(側面観・北から)



c. 同上
(側面観・東から)



a. 松谷1号古墓
立石・丸石下の
台状の石検出状況
(北から)



b. 松谷1号古墓
角礫層上面検出状況
(北から)



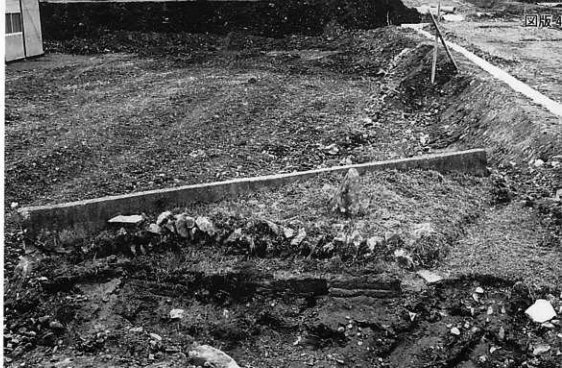
(左) c. 松谷1号古墓
厚増縁石2段目
(北西・北から)



(右) d. 松谷1号古墓
角礫層上面
遺物出土状況
(西半部・北から)



a. 松谷2号古墓
調査前近景
(西から)



b. 松谷2号古墓
石造石室構造の状況
(西から)



c. 松谷2号古墓
土層断面 (北から)



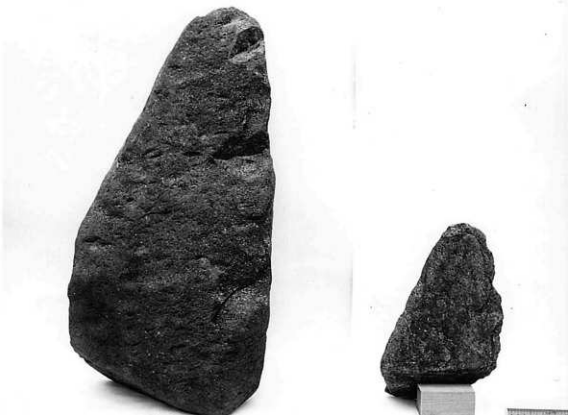
a. 松谷2号古墓
調査接近景
(北西から)



b. 松谷1号古塚出土
丸石
(右下端4第71920)



c. (右) 松谷1号古塚
立石
(左) 松谷2号古塚
立石





松谷1号古墓角礫層内・上面出土の陶磁器・土器・数珠



松谷1号古墓円礎層・撒乱部分出土の陶磁器・土製品



松谷1号古墓出土陶器 (第6图1)



松谷1号古墓出土磁器 (第6图2)



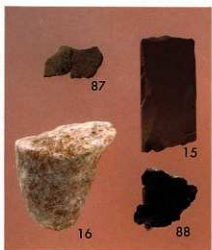
松谷1号古墓出土磁器 (第6图3)



松谷1号古墓出土磁器 (第7图23)



松谷1号古墓出土磁器 (第7图26)



松谷1号古墓出土石製品



松谷2号古墓出土・採集遺物

報告書抄録

ふりがな	まつたにいち・にごうこぼはっかつちようさほうこくしょ							
書名	松谷1・2号古墓発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第134集							
編著者名	沖 聡明・飯治 益生							
編集機関	財団法人広島県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒733 広島県広島市西区観音新町4丁目8-49 TEL 082-295-5751							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ・ 緯 度	東 経 ・ 緯 度	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
		市 町 村	道 路 番 号					
松谷1号古墓	広島県三次市 菅河町2145	34209		34度 45分 10秒	132度 50分 30秒	19940516～ 19940615	12	県営担い手 育成基金整 備事業(菅 河上地区) にかかる発 掘調査
松谷2号古墓	広島県三次市 菅河町2148	34209		34度 45分 10秒	132度 50分 30秒	19940516～ 19940615	8	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特 記 事 項		
松谷1号古墓	墓 祭祀	江戸時代末 明治時代	積石基壇 1基	陶磁器、土器、 石塔、数珠、 砥石、立石、 丸石		19世紀初頭～中葉に構築さ れた古墓の基壇を、民間信 仰施設へ転用あるいはその 性格を付加した。		
松谷2号古墓	祭祀	江戸時代末 ～明治初期 時期不明	石垣状遺構 1基 立 石 1基 流 路 跡 1条	陶磁器、土器、 ガラス器		明治時代以降の民間信仰施 設。		

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第134集

松谷1・2号古墓発掘調査報告書

発行日 1995年3月31日

編集・発行 財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター
〒733 広島県広島市西区殿谷新町4丁目8番49号
TEL (082)295-5751 FAX (082)291-3951

印刷所 徳エル・コーポレーション
〒733 広島県広島市西区商工センター7丁目5-17
TEL (082)277-5011 FAX (082)277-7270